

表現主義の再評価について (1)

——一九六〇年以後の研究文献から——

土 肥 美 夫

1

表現主義とよばれる諸芸術の担い手、内容、時期については、それぞれの芸術的あるいは政治的立場にしたがって諸家のあいだにさまざまな見解の相違がみうけられるが、ここでは、第一次大戦と革命をふくむ「一九一〇年代」のドイツにおける「革新的¹」な芸術、その芸術「運動」の担い手たちを総称するものと、一応そう規定しておこう。いろいろと力点の相違があるにしても、一九一〇年代が表現主義の主要な時期であり、その内容が革新的ないし革命的であり、それが集団的な運動として展開されたことについては、ほぼ異論がないであろうと

思われるからである。表現主義のワイマル共和国時代における位置づけについては、いわゆる「二〇年代」問題と関連して後でふれるとして、それがナチスの政権奪取後、焚書や「退廃芸術」の烙印をおされて追放されたこと、またほとんど同時期にモスクワ亡命のドイツ人作家同盟機関誌「ダス・ヴォルト (Das Wort)」で行なわれた、いわゆる「表現主義論争」においてルカーチなどの理論家により鋭く批判され否認されたこと、それらのことはナチスの芸術政策ならびに社会主義リアリズム論との関連でいまなおしばしばとりあげられているので、ここではその事実を前提として稿を進めたい²。

本稿で対象とする再評価ないし再検討というのは、第

二次大戦後のドイツで行なわれた表現主義芸術の復権とそれにもなる評価方向の問題である。ナチス時代に墓場へ葬られ、冥府のなかをさ迷い、あるいは諸外国へ難を逃れていた表現主義の芸術作品を集収し、整理し、出版する仕事がよく緒につき、戦後生存していた表現主義作家たちの回想やアンソロジーが公刊され、研究書が出はじめた一九五〇年代の成果については、ブリンクマンの研究報告³がその概要を手ざわよく総括している。西ドイツにおける一九五〇年代の表現主義復権は、埋もれ散佚した作品の集収、整理という困難な条件があったにせよ、ナチス時代に断絶した近代芸術への接点を回復しようとする意図のもとに、主として第一次大戦前のいわゆる「初期」表現主義芸術偏重に傾斜していた⁴。それとおよそ対照的に、東ドイツでは、一九五九年に活動を開始した「ドイツ・プロレタリア革命文学研究グループ」⁵が中心となり、一九一七年のロシア十月革命、一九一八年のドイツ十一月革命を史的原点として集収と研究の共同作業が行なわれ、社会主義リアリズムとの関連においてのみ表現主義が問題とされる傾向がうちだされた。したがって表現主義の再評価というよりも再検討といったほうが正しい。表現主義自体複雑に錯綜して容易にとらえがたい対象であるうえに、現代的な評価ないし検討の

方向には政治体制の相違が明瞭に反映しているのである。本稿では、一九五〇年代の成果をふまえて一九六〇年代に新しく出てきた表現主義再評価の問題を、主要文献の紹介をとおして取りあげるわけであるが、もとより広汎多岐にわたる対象に通暁するには程遠いわたしにとって、以下の叙述が表現主義研究のためのささやかなノートにすぎず、ブリンクマンの総括以後の文献、しかも限られた文献の諸問題のみをとりあげる単なる報告にすぎないことをあらかじめおことわりしておかねばならない。

2

西ドイツにおける表現主義作品の集収活動が一応の成果を収めて展示され、表現主義の復権を強く大衆に印象づけたのは、一九六〇年にマールバッハのシラー・ナツィオナルムゼウムで催された「表現主義、文学と美術」展⁶である。この画期的な展示会のカタログを編集したP・ラーベは、その後表現主義運動の中心的な雑誌「ディ・アクツィオン (Die Aktion)」のFaksimile版⁷の編集に当たるとともに、その他さまざまな雑誌・文献などの集収と整理の仕事を続け、二冊のドキュメンタリーなアンソロジー⁸をも編集している。そのさいラーベが表

現主義運動の地域的多様性（ベルリン、ミュンヘン、ドレーズデン、プラハなど）および時代的な展開（第一次大戦前、大戦中、革命期と戦後）を重視しているのに対して、表現主義の復権に寄与したもう一人の推進者P・ペルトナーのアンソロジー二巻⁹は、運動、地域性、時代性の諸相を無視して、イズム（表現主義、行動主義、未来主義、ダダイズムなど）とジャンル（芸術論、詩論、演劇論など）の観点から整理されている。そこでは、ラーベが重視している「アクツイオン」誌の運動が表現主義から切り離されて「行動主義」として区別されるとともに、芸術主義を前面におしたてて「アクツイオン」誌と対立した前衛詩「デア・シュトゥルム(Der Sturm)」所載の文章に多くの紙面がさかれている。ペルトナーのこのような編集方針は、表現主義の現代的な意義を政治的行動的な面よりも芸術的形式的な面、また戯曲よりも演劇的な面におく彼の見解によるもので、その立場は「表現主義と演劇」¹⁰と題する最近の論文においてさらに明確にうちだされている。ペルトナーの見解の一面性については、あとで問題にするとして、表現主義と行動主義とを峻別する彼の形式尊重^{フオルム}の立場が、彼とは逆の意味で、美術の領域でもみうけられることを指摘しておきたい。たとえば、表現主義絵画を「デイ・ブリュッケ(Die

Brücke)」画家集団やコシユカなどの具象的なデフォルマンションの美術に限定して「デア・ブラウエ・ライター(Der Blaue Reiter)」グループなどの抽象化を志向する美術をそれと区別するW・ハフトマン¹¹らの立場がそれである。

一九六〇年は、表現主義の復権を公にしたマルバツハの「表現主義、文学と美術」展によってばかりでなく、六〇年代を志向する新たな問題提起の企画がいくつか試みられた点でも画期的な年であった。そのひとつは、パリの近代美術館で開かれた「現代美術の起源」¹²展であり、もうひとつはミュンヘン市主催の「〈二〇年代〉会議」である。この二つの企画は、第二次大戦後十五年にしてヨーロッパが戦後の時代から脱却して汎ヨーロッパ的な共同体を志向しはじめ、また西ドイツが奇蹟的といわれる復興をとげて経済的安定期にはいった、そのような状況なしには考えられない出来ごとであると思われる。つまり、パリの「現代美術の起源」展では、全ヨーロッパ的な世紀末芸術との関連において、ドイツ表現派の美術が戦前戦後を通じて初めてパリにその全貌を展示する機会を与えられ、さらにこの「起源」展を契機にして、それまで「ナチスが犯した罪ほろぼし」(マルバツハの表現主義展における館長ホフマン博士の開会

の辞)の意識で近代芸術の伝統を回復しようとしていた表現主義復権の企てが、その後、一九一〇年代の表現主義を超えさらにヨーロッパ世紀末芸術との関連を問題にする方向へとしだいに拡大されるようになった。マニエリスムの再評価と平行して一種の汎ヨーロッパ的な文藝意識をよびもどした六〇年代のいわゆる世紀末芸術 (Part nouveau, Jugendstil, Secessionstil) 再評価については、かつて小論を書いたことがあるので、¹³ここでは詳しくふれないが、この現象が文学にも波及して「文学的ユーゲント様式 (Jugendstil)」¹⁴ というような新しい概念を文学史の領域にもちこむまでにいたったことをつけ加えて指摘しておきたい。われわれは、このような世紀末芸術再評価の気運が、従来世紀末との断絶のみで強調されていた一九一〇年代の前衛芸術観をむしろ世紀末との連続面を導入して把握する方向へと転換させたことに注意しておかねばならない。美術でも文学でも、一八九〇年代から一九二〇年代にかけての精神的あるいは様式的な発展の持続性ないし統一性が力説され、美術史家W・ホーフマンの近著¹⁵では立体派、野獣派、表現派、未来派など絵画中心の前衛芸術が世紀末とダダおよびデ・ステイルとの間にはさまれた「フォルムのしきい」として解明され、建築を含む造形フォルム一般の発

展から解釈し直されている。けっきょく、世紀末芸術のふくむ可能性を評価し、その発展史的な持続性を極度に強調するならば、立体派も未来派も表現派も、一八九〇年から一九二〇年代へかけて持続的な発展をとげた近代芸術の一段階にすぎなくなり、その結果、近代芸術発展史のアンティテーゼとなるものは、ナチスのイデオロギーに導かれた国民芸術とそれに対立する社会主義リアリズムの芸術というともに反近代を志向する芸術となるのではないか、そういう疑問も生じてくるだろう。たしかに一九三〇年代をふまえて考えるならば、そのような疑問にも現実的な可能性があるだろう。しかしわたし自身は、近代芸術の発展とそのトータルな否定との対立を前提とする議論には組しえないし、むしろ近代芸術の発展そのものに内在する弁証法に注目して表現主義再評価の問題に接近していきたいと思う。実は、さきにあげたホーフマンの論旨も、単なる世紀末芸術再評価ではなく、「模倣から現実へ」という書名にも現われているとおり、彼が「画架芸術」とよぶ絵画芸術中心の芸術観を克服し、多様多層化した現実を造形しうる基本的な諸要素を世紀末芸術に見出したところに論旨の出発点があったのであり、したがって「模倣から現実へ」という彼の近代美術発展史観では絵画中心前衛芸術の否定ないし克

服の課題が追及されているのである。現実と表現との関連にまだ問題を残してはいるが、¹⁶彼の近著は、世紀末芸術ならびにそれと一九一〇年代前衛芸術との関係に新たな視点を与えた好著といえよう。

3

一九六〇年代において、表現主義の再評価をめぐり新たな問題が提起されるもうひとつの契機となったのは、あらかじめ指摘しておいたように、ミュンヘンでの「△二〇年代V会議」¹⁷である。六〇年代の西独においてヴァイマル共和国の二〇年代が意識されてきた背景には、さきにあげた経済的安定のほか、ベルリン問題をめぐって東西の接点に立たされた政治的状況の類似などさまざまな要素があるだろう。しばしば「黄金の」(golden)、あるいは「狂騒の」(toll, roaring)、あるいは「無性格の (ohne Eigenschaften)」という形容詞をつけて語られる「二〇年代」は、敗戦と革命がもたらしたその初期のカオスとインフレの状況、末期における経済恐慌とナチスの勢力拡大、その間にはさまれゆり動かされて恒常的な政治的経済的不安を内包していたにもかかわらず、世紀末芸術から表現主義芸術へとうけつがれ、一九一四年の帝国主義戦争によって中断されたドイツの文化的革

新運動にふたたび発展の可能性が約束された好機の時代でもあった。カイザーとブルジョワジーが意図した「中部ヨーロッパ帝国」の夢想は敗戦により崩れ去り、そのような夢想の体制的基盤に向けられた一九一八年十一月革命もユートピアに終わったが、この敗戦と革命は、政治的挫折にもかかわらず、戦後の「小ドイツ」が戦中のナショナリズムを否定して、東(ソヴィエト)西(パリ)両面との新しい関係を求める出発点となった。ヴァイマル共和国は、左翼からも右翼からもすげなく「ままこ」扱いされたところの、敗戦と革命の「落し子」だったが、それがまさに嫡出子ちやくしゅつしでないがゆえに、ヴァイマル文化を特色づける知的文化的活動の可能性が生じたことも真実であろう。ヴァイマル共和国に対する知識人の「冷淡な」(indifferent)な関係と、ヴァイマル文化の「即物的」(sachlich)な性格とは相即している。わたしにはもとより政治的状況を詳細に分析するだけの能力も資格もない。しかし、たとえば、ヴァイマル文化の典型である「バウハウス(Bauhaus)」や「ノーヴェンバー・グループ」(Die Novembergruppe)の活動をとりあげてみても、右のような事情は十分に察知され、ピーター・ゲイが、ヴァイマル文化を、歴史によって内側に入らされた本来はアウトサイダーの作ったもの (the Outsider as

Insider)¹⁸と特徴づけているのも、肯定できるのである。ここでは、いまのべた事柄を前提として、「二〇年代」の討論が表現主義の再評価とどのように関わっているかを問題にしよう。

ミュンヘンの「△二〇年代▽会議」でこの問題に議論が集中しているのは、ブルーノー・E・ヴェルナーの報告「二〇年代における文学と演劇」¹⁹をめぐる彼とL・マルクーゼとの討論である。ヴェルナーが、二〇年代の文学・演劇を、現代の文化的風土にも持続している混沌と即物性の諸相に重点をおいてパノラマ的に概観したのに対し、マルクーゼは、二〇年代の文学的クリーマを規定しているのはむしろ表現主義のバトスであると反駁し、戦中と革命の時期に高揚した△O-Menschen-Literatur▽や人間変革の演劇が（たとえ一〇年代に書かれたとしても）二〇年代になって初めて影響をおよぼし効果を与えた事情を説明する。そしてヴェルナーの二〇年代像には、現代人の極度に冷淡な態度を反映する「表現主義恐怖性」(Expressionismus-Phobie)が内在していると批判する。ヴェルナーとマルクーゼの対立には、二〇年代の混沌の時代に青春を経験した世代と表現主義を身をもって体験した世代との相違が感じられるが、ヴェルナーの二〇年代像のなかでは表現主義が鳴り

終り (ausklingend) の現象としてののみとりあつかわれ、評価の観点が見出せない。この点で、マルクーゼの批判はヴェルナーの二〇年代像の表面的な浅薄さを正当に指摘していると思われる。しかしながら、マルクーゼがとりあげる理想主義的な△O-Menschen-Literatur▽の意義が、はたしてそのまま表現主義の再評価につながるかどうかは疑問であり、ヴェルナーの立場とは逆に、マルクーゼもまた二〇年代の即物性との関係にはふれないまま表現主義的バトスの強調にとどまっている。二〇年代を回想の対象とし伝説的に物語ろうとする人びとの場合は別として、それを歴史的客観的に対象とする場合、わたしにとっては、それが「表現主義とナチズムとの間」としてどのような積極的可能性（あるいは失なわれた可能性）で把握できるかに関心がある。ミュンヘンの「△二〇年代▽会議」後、おそらくそれに触発されたと思われるいくつかの論文が雑誌に発表されたが、そのうちH・プレスナー「二〇年代の伝説」²⁰、テオドル・W・アドルノ「かの二〇年代」²⁰、およびレオ・コーフラーの「二〇年代とその帰結」²¹は、いずれも強い歴史的批判意識に貫かれている。『立ち遅れの国民』²²の著者プレスナーは、近代化立ち遅れの矛盾と根強い地方主義によって政治的統一が拒まれていたドイツにおいては文化改革による社

会改革のみが残された道だったと説き、二〇年代の文化的基礎がすでに世紀末芸術から表現主義にいたる大戦前に出来ていたことを強調する。プレスナーがヴァイマル共和国の状況、首都としてのベルリンの地位確立、文化的変革路線の推進など主としてドイツの政治的状況の面から二〇年代のアクチュアリティを認めるのに対し、アドルノは、政治的に解放された二〇年代ドイツ社会にユートピア的な可能性の一面を認めながらも、一〇年代に切り開かれた新芸術の英雄的な時代が二〇年代においては衰退の方向をたどり、その作品の抽象的性格も政治的関連欠如の代用品にすぎなかった点を指摘し、三〇年代以後の観点から今日の二〇年代リヴァイヴァルにむしる警告的に発言している。三〇年代のナチスは、その表現主義芸術の追放政策以前に、たとえば表現主義美術の一面（ノルデ、バルラハ、シュミットロットルフなど）を「北方芸術」のイデオロギーで擁護しようとしたし、ピスカートルのアジプロ劇手法さえ党の宣伝手段に利用しようとした。²³ そういう苦い経験をもつ今日のわれわれが、三〇年代の意識なしに二〇年代を問題としえないことは当然である。しかしそのこととは別に、一〇年代を新芸術（立体派、初期表現派、シェーンベルクらの無調音楽派）の「英雄的」(heroisch)な時代とし、二〇

年代のバウハウス時代のカンディンスキー、クレー、十二音楽時代のシェーンベルクに芸術的衰退をみるアドルノの見解には、疑問の余地がある。問題は、E・ブロッホが「過渡期」としてとらえる芸術現象の内容に関わっている。前述の論文において、コーフラーは、前世紀末から始まって、二〇年に頂点に達する文学の新しいエポックをとりあげ、一九一八年十一月革命前後の表現主義文学を一九一〇年前後のドイツ自然主義文学と対照させながら、両者の社会批判がともに情感的反省 (die sentimentarische Reflexion) による見かけ上の批判 (Scheinkritik) にとどまり、主観的に革命を志向しながら保守的な存在論ソットロギーにおちいった所以を鋭く突いている。彼にとつて、「個人の変革」を叫ぶ表現主義は、カント、フィヒテ的な「純粹」倫理の新しい形態での反復にすぎないものとされ、表現主義を通過した二〇年代アヴァンギャルドの決定的な発見は、「叙事的主体」(das epische Subjekt) におかれ、それを実現したブレヒトの評価に最大の関心がはらわれる。

総じて、二〇年代の文学・芸術を問題とする場合、表現主義（ならびに二〇年代の「新即物主義」）をめぐるルカーチの近代芸術否定論と近代芸術の革命性を主張するW・エームリヒの肯定論が二つの際立って対立した芸

術論として前提になり、コーフラーも両者の対立した立場を批判しながら論旨を展開しているのであるが、その結果、表現主義的前衛芸術の帰結として「叙事的主体」を引き出しているところに、一〇年代末から二〇年代への過渡期にたいする彼の積極的姿勢がみうけられる。しかし彼の叙事的主体論は、「疎外と入叙事的演劇」前衛芸術における真なるものと真ならざるものとの弁証法」および「ニヒリズムの叙事的演劇とヒューマニズムの叙事的演劇—叙事的主体の二つの使用法」と題された二つの前衛芸術論において具体的に展開されているように、古典的ヒューマニズムと人間疎外を内容とする前衛芸術との対立を弁証法的に解決したブレヒトによってのみ初めて真実の仕方を実現されたとみなされ、表現主義はそれへの移行のさい「極めて助けになった」と述べられているだけで、どのように役立ったかについてはほとんどふれられていない。この点、J・ヘルマンの「革命としての表現主義」論²⁶は、二〇年代の叙事的即物的な傾向への展望を中心におきながら、それらの要素がすでに表現主義文学に内在していたことを詳細に分析し、表現主義と二〇年代との関連に新しい照明を与えている。最近きわめて精力的な著述活動をつづけているヘルマンは、従来、反工業社会的ユートピア（エームリヒ）、個

人主義的変革（コーフラー）など、主観主義的な面ばかり強調されてきた表現主義観に対し、彼が「即物文化」（Sachkultur）とよぶ現代的な客観世界への志向を認め、表現主義の今日的意義を力説している。彼の立場は、エームリヒやペルトナーに代表されるフォルマリズムの「文学革命」ないし「芸術革命」論とルカーチおよび彼のマルクス主義芸術論を修正した歴史社会派の弁証法的芸術論とを、「即物文化」論へと共に止揚しようとしているように思われる。

前述のように、コーフラーは、古典的ヒューマニズムと近代社会における疎外との対立の問題を弁証法的に解決したブレヒトに彼の前衛芸術論の頂点をおき、表現主義を否定的媒介の要素としてしか認めなかったが、それに対してヘルマンは、ブレヒトのみならず表現主義にも「内的弁証法」（innere Dialektik）を認める。なぜなら、よくいわれる表現主義の「自我」概念に、小市民的個人主義的な変革の叫びよりもむしろ脱近代、原始的な「原初的なもの」（Das Elementare）、集団的、無意識的な「人間」（Urmensch）をみるからである。その実証として、彼は、表現主義者の綱領の特徴ともいえる人類や兄弟同朋への理想主義的人間の呼びかけとは別に、作品にあらわれている動物や事物のメタファーをあげ、究極

の価値が従来の意味での人間的なものではなく物象、事象、抽象的なものにおかれ、したがって人間的形像も、「構成されたもの」であり、「理念の具象化」であり、「概念の変様」である所以を、ベン、シュテルンハイム、トラーなどの作品を分析して説明する。このような非人間化された形像、有機的ではなく構成的な創作に、新しい即物性を認め、工業化社会における「即物文化」への志向をみるのである。彼が政治的、革命的とよぶこのような表現主義のとらえ方は、原初的要素を求め、すべての諸前提を問い直し、実験し、ユートピアの絶対化を志向したところに表現主義からダダに至る「芸術革命」の本質をみるエムリヒの立場と形式的な面で似通っているように思われるが、彼が鋭く批判しているように、エムリヒの反工業社会的なユートピア的近代芸術論と根本的に異なり、それとは逆に、表現主義全体を工業化された社会の物象、事象へむかう方向において積極的に評価しているのである。彼のいう表現主義の内的弁証法と歴史的唯物論的弁証法との関係については明らかにされておらず、その点に疑問が残るが、表現主義に新しい方向性を与えた彼の論文は、ひとつの試論として十分評価されてよいであろう。彼のいう革命としての表現主義論は、R・グリムと共編でつい最近出版された『いわゆ

る二〇年代²⁷』でもさらに受けつがれている。つまり、そこで彼がとりあげた「オイディプス喪失あるいは二〇年代群衆体験²⁸のなかでへ止揚されたV表現主義における父と息子の葛藤²⁸」というテーマは、さきに要約した「表現主義の内的弁証法」のひとつのケース・スタディと解されてよい。この論文では、表現主義文学（特に戯曲）の大きな主題のひとつとなっている父と息子とのコンフリクト、息子の父親殺しにまで発展するこの問題が、断絶した若い世代の父（＝権威）の世界に対する社会的反逆関係と母親と息子の性的誘惑関係という両面、いわばマルクスとフロイトの両面からとらえられる。しかしこの失なわれた世代の息子、「表現主義的オイディプス」とよばれる新しいオイディプスは、ソフォクレスの悲劇的なオイディプスと異なって、最後に、新しく出現した「群衆」「階級」のなかにとびこんでいく。このように把握された息子像において、ヘルマントが強調するのは、劇的行動ないし筋の過激さや人間性のパトスではなく、息子像の虚構性であり、失なわれた世代の個から集団への転身である。二〇年代は、組織的・非組織的たるを問わず、「群衆」の時代となったが、表現主義の社会的反逆はそのなかに止揚され、無名的にその理念の担い手になった、とヘルマントは説く。彼が、二〇年代を「父

親の報復」として表現主義の「息子の反逆」と対立させるペーター・ゲイの所説に反対し、二〇年代の新即物主義を「克服された」または「止揚された」表現主義と規定するのも、繰返しのべているように表現主義を内的弁証法とし解釈するからである。同じ『いわゆる二〇年代』で「表現主義とファシズムとの間²⁹」というテーマをとりあげているR・グリムは、さらに、社会主義リアリズムの意味での意識の発展をも「即物化された表現主義の変貌」としてとらえ、ブレヒトの『男は男』（一九二六年）をその例証として分析し、位置づけている。

『いわゆる二〇年代』という共著は、表紙に *First Wisconsin Workshop* と記されているように、アメリカのゲルマニスト・グループのティーム・ワークから生れた成果である。もとより六〇年代に西ドイツのゲルマニストたちが公にした表現主義研究書もかなりあり、たとえばK・L・シュナイダーの『こわれた形式―表現主義における言葉と形象³⁰』、叙情詩専門のこのシュナイダーや美術のW・ハフトマンをはじめ専門領域の研究者たち数人が執筆しているH・シュテフェン編『ドイツ表現主義、諸形式と諸様相³¹』などは、個別的領域においてそれぞれ高い水準を示している。しかし表現主義全体の方角づけとなると、研究書の多くは五〇年代における表現

主義復権の方向（初期表現主義の偏重、政治的無関心、文献主義、美的な作品解釈）をうけついで成果にとどまっている。それにはたいしてむしろ外国のゲルマニストたちから新しいパースペクティブを切り開く表現主義のダイナミックな解釈が出ていることは注目されてよい。このことは、E・コリンスキの『表現主義の政治参加³²』や、六〇年代における文学的表現主義研究の集大成ともいふべきW・ローテ編の名著『文学としての表現主義、総合的研究論文集³³』に最も端的にあらわれている。この書に集約された成果については、かつて書評を試みたことがあるので詳しくふれないが、ここでは執筆者四十四人のうち約半数が外国（特にアメリカ）のゲルマニストで占められ、彼らの研究には、R・ヒントン・トーマスの「自我と世界、表現主義と社会³⁴」、K・ダニエルの「表現主義と技術」など二〇年代の問題意識にもつながる社会的立場からのアプローチ、それに極端に対立するE・ローナーの言語構造論的な表現主義叙情詩へのアプローチなど、その内容の当否はいま問わないとして、新しい角度からの問題提起がなされていることは確かである。このような意味で、『いわゆる二〇年代』の編者も述べているように、いまやドイツ表現主義研究にも、五〇年代・六〇年代の回顧主義、文献主義、作品解釈主義

とは異なつて、「今日ふたたび現実へ還ろうとする」方向がでてきているのである。しかもこの方向への努力が主として外国のゲルマニストたちによつてなされているという事情は、ドイツにおけるゲルマニステイクの問題にも関わっているように思われる。ここでは、ドイツ語圏におけるダダイズムの運動について、西ドイツのゲルマニストの労作がほとんど見当らず、³⁵研究の欠落が露呈されていることを指摘しておこう。このことは、一九一八年十一月革命にたいする歴史的意識の欠落とも密接に関連しており、L・マルクーゼのいう「表現主義恐怖症」がここに最も如実に示されている。ダダは、さきほどとりあげた表現主義の弁証法を理解するうえでもその否定的テーゼとなる最も大きな契機であり、それなしには二〇年代のジンテーゼも論証されえないであろう。ドイツ革命以後の芸術行動を対象として最近出版されたW・シュミット著『ドイツにおける新即物主義と魔術的リアリズム 1918～1933』³⁶とH・クリーマン著『十一月グルッペ』³⁷でも、表現主義やダダは様式的にのみ理解され、芸術そのものの内実に関わる政治的革命的な視点、そこから出発する二〇年代以後への展望は、ほとんど欠落している、ドキュメント的な価値にとどまっているといわざるをえない。

4

西ドイツの場合と反対に、東ドイツでは、ロシア十月革命、ドイツ十一月革命を頂点として、「プロレタリア革命文学研究」および「社会主義文学の歴史」の枠内でのみ表現主義がとりあげられていることは、すでに序文でふれたとおりである。したがって、西ドイツのように、表現主義を主題にした展覧会も著述も皆無であり、その意味では表現主義「復権」の現象はみうけられない。しかしながら、ルカーチが形式主義、デカダンスとして批判したのと同じ方向で全面的に否認されているかというところ、けつしてそうではなく、国家的要請にもとづく前述のような方向で研究され、再検討されていて、選択された資料の出版も³⁸かなり行なわれている。そのさい評価の対象となるのは、H・マン、初期のベッヒャー、ヴォルフ、ブレヒトのような作家、コルヴェイツ、ハートフェイルド、O・ディクス、G・グロッス、パールラハのような芸術家、表現主義運動の面では「アクツイオーン」誌、Maitis 出版社の活動などに限られていて、表現主義全体の評価位置づけとなると必ずしも明確ではなかった。六〇年代における表現主義再検討の文献としてまず目につくのは、M・バイアーの雑誌論文「表現主義、文学

と美術1910～1923』³⁹である。これは、題名からも察知されるように、西独マールバツハの表現主義展を批判した内容のもので、「モスクワ文学討論」(NDL Heft 1/60)の成果からルカーチの表現主義否認の一面性を訂正しながらも、歴史的客観的な視点と展望を欠いた前記表現主義展の展示構想批判に終始している。六〇年十一月から翌年にかけて東独ハレのモーリッツブルク美術館で催された「二〇世紀前半のドイツ絵画と版画」⁴⁰展では、「ブリュッケ」派「青い騎士」派をはじめ多数の表現主義作品が展示されたが、そのカタログに書かれたE・シュペーアの解説文は、とくに「青い騎士」派の抽象化表現とそれが流行化している西ドイツの現況に批判を加えながら、労働者や群衆をテーマにした二〇年代・三〇年代画家の「健全なリアリズム」を評価している。しかしそこにみられる抽象形式批判やテーマ主義は、いまだ教条的な分析の域を出ていない。このような硬直した姿勢を乗り越え、表現主義について積極的な評価の問題を提起したのは、東ドイツにおいても外国(とくにソヴィエト)のゲルマニストたちであった。一九六二年にライプチヒで開かれた東欧圏の国際文学会議記録『社会主義文学の歴史のために』に掲載されているニーナ・パウロヴァの講演「表現主義とリアリズム」⁴¹は、わたしの知るかぎり、

そのような積極的な評価の最初のものである。つまり、そこでは、表現主義の刺戟を受けながらそこから離脱したベツヒャーやブレヒトなどのリアリズムに重点がおかれ、従来どおり表現主義の主観性、具体性の欠如が批判されてそれが前提となつているとしても、論旨の要点はむしろリアリズムとは異なる表現主義左派(「アクツイオン」誌をめぐる行動的な作家たち)の「革命的なロマンティズム」評価に向けられている。かつてルカーチにより「本質への逃避」として批判された彼らの抽象的なユートピア思想においては、単なる現実描写の放棄が問題だったのではない、「落下する石ではなく重力の法則」が、個人でなく普遍が、分離でなく統一が問題だったのだとして、その思想が評価される。社会主義文学への寄与についても、彼らのいう「社会的人間」が社会主義文学の主人公の内的生命と共通であり、演劇舞台を演説の場に変えた彼らの戯曲や時代批判的な彼らの詩や散文も、立場の決定を要求する社会主義文学に本質的に近いものとして、評価される。けっきょく、パウロヴァは、よく問題にされる表現主義の叙情的エゴを当時の普遍的な気分のシンボルだったとし、そこに息吹^{いぶ}いている「叙情的なもの」(das Lyrische)を現代のリアリズム文学にも貫いている持続的な要素としてとらえるのであ

る。このような、革命における叙情的、情念的な要素の再評価は、一九六六年にモスクワで行なわれた表現主義シンポジウムにおいて、表現主義の美術をとりあげたネドンヴィン⁴²により、さらに広いパースペクティヴをもって展開される。しかしこの問題は、ドイツ表現主義評価の域をこえて、表現主義芸術一般の現代における位置づけの問題ともからんでくるので、フランスのM・ラゴン⁴³やイギリスのJ・ウィレット⁴⁴の表現主義芸術論と連関させ、稿を改めて報告し論究することにした。

東ドイツにおける表現主義文学の再検討ないし再評価については、一九六六年に刊行されたH・カウフマン編著『ドイツ現代文学批判、危機と変革』（邦訳名）を是非とりあげねばならないのだが、この劃期的な著作はすでに邦訳され、書評も行なわれているし、またこの文献史的な報告の枠をはるかにこえた問題を含んでいるので、ここでは深くたちいった考察を割愛し、重要と思われる次の点を指摘するにとどめたい。それは、東欧圏における前期の問題提起や東独社会主義文学研究グループの研究成果をふまえてうちだされたこの書の批判的かつ積極的な表現主義文学再評価が、先にとりあげたヘルマントなどにみられるような西欧での表現主義再評価と相互にふれあい重なりあう面をもっているという点である。も

とよりカウフマンのいう「社会主義」の立場とヘルマントのいう「即物文化」の立場とは異なっているが、文学ないし芸術の社会的変化の観点からみれば、ただたんに革命前後のいわゆる後期表現主義の重視という時代的なメルクマールの共通性にとどまらず、評価内容についても表現主義の変貌（ないしより積極的には「内的弁証法」）について共通の討論の場が形成されてきたといえる。このような評価の接近は、三〇年代の表現主義論争および五〇年代における東西での評価の対立と明らかに異なる様相を示しており、六〇年代において獲得された新たな成果として十分注目されてよいであろう。

〔注〕

- 1 「若い世代の突出」「前衛的」「反市民的」などの特徴をいう。
- 2 詳しくは河出書房新社刊『ドイツ表現主義』全五巻（詩、小説、演劇・映画、美術・音楽、運動と理論）および盛田書店刊の池田浩士編訳『ルカーチ、プロッホ、ゼーガース―表現主義論争』を参照されたい。
- 3 Brinkmann, Richard: Expressionismus, Forschungsprobleme. 1952-1960. Stuttgart 1961.
- 4 F. Martini, W. Muschg, K. L. Schneider などの表現主義研究諸論文参照。

- 5 F. Albrecht, K. Kändler, K. Klein, E. Mehnert
⁴⁹ Arbeitsgruppe zur Forschung der proletarisch-revolutionären Literatur Deutschlands
- 9 Expressionismus. Literatur und Kunst 1910-1923. Eine Ausstellung des Deutschen Literaturarchivs im Schiller-Nationalmuseum Marbach/Necker vom 8.5. ~ 31. 10. 1960. Katalog hrsg. von Paul Raabe und H. L. Greve, Stuttgart 1960. わが国で最近出版された菊盛英夫著『文学的表現主義』（中央大学出版局刊）にもこの展覧会が著述の直接の動機となった事情が述べられている。
- 7 Die Aktion, Faksimile Ausgabe, Darmstadt 1961. 現在までに一九一一年の創刊号から一九一八年までの分が出版され、この版の初めにラーベは「雑誌の歴史」と題する序文を書いている。彼はまたこの雑誌の抜萃集ともいうべき小冊子をも編集つづら（Ich schneide die Zeit aus, Expressionismus und Politik in Franz Pfemferts >Aktion<. Hrsg. von Paul Raabe, München 1964）
- 8 Expressionismus. Aufzeichnungen und Erinnerungen. Freiburg 1965. Expressionismus. Der Kampf um eine literarische Bewegung München 1965.
- 6 Pörtner, Paul: Literatur-Revolution 1910-1925. Dokumente, Manifeste, Programme, 2 Bde, Darmstadt/Berlin/Neuwied 1960 und 1961.
- 10 Pörtner, Paul: Expressionismus und Theater in: Expressionismus als Literatur. Gesammelte Studien. Hrsg. von Wolfgang Rothe. Bern und München 1969.
- 11 Haftmann, Werner: Malerei im 20. Jahrhundert München 1950. 244頁 Maß und Form in der deutschen Malerei in: Der deutsche Expressionismus. Formen und Gestalten. Hrsg. von Hans Steffen Göttingen 1965 参照。
- 12 Jean Cassou, Emile Langui, Nikolaus Pevsner: Les sources du vingtième siècle, Paris 1961 カタログとは別に同名の著書が、英、独の各国語版で刊行された。
- 13 拙論「ドイツにおける世紀末芸術—表現主義芸術運動の歴史的背景として」、同志社大学人文学会誌『人文学』第百十三号（一九六九年八月）を参照されたい。
- 14 たじふらぐ Fritze, Horst: Literarischer Jugendstil und Expressionismus. Stuttgart 1969. Hermand, Jost: Jugendstil. Ein Forschungsbericht 1918-1964. Stuttgart 1965. Jost, Dominik: Jugendstil und Expressionismus in: Expressionismus als Literatur, Hrsg. von W. Rothe Bern / München 1969.
- 15 Hofmann, Werner: Von der Nachahmung zur Wirklichkeit Die schöpferische Befreiung der Kunst 1890-1917 Köln 1970.

- 16 ホーフマンは、マルクス主義的な「現実の変革」と彼の志向する芸術観との関連を主題的にとりあげる著作を準備していることを、右の本のなかで予告している。
- 17 一九六〇年十一月二日から五日間にわたって行なわれた。シュンヒェン市主催第三回精神科学会議が選んだテーマ「二〇年代」をめぐって、五人の報告者がそれぞれの専門領域から発言し、討論がなされた。報告者とその発表題目は次の通りである。S・ギーデオン「ハウハウスとその時代」、W・コンツェ「二〇年代におけるドイツの政治的特殊位置」、ブルノー・E・ヴェルナー「二〇年代の文学と演劇」、R・ケーニヒ「二〇年代の社会学のために」、E・ドヴェンファート「ヴァイマル時代のジャーナリズム」、新聞、放送、映画」。これらの発表と討論の内容は公刊された（Die Zeit ohne Eigenschaften—Eine Bilanz der zwanziger Jahre. Hrsg. von Leonhard Reinisch Stuttgart 1961）書名は巻頭に引用されたムンルの小説『特性のなご男』の一節から取られたものである。
- 18 Gay, Peter: Weimar Culture, The Outsider as Insider. New York 1968. (邦訳『ピーター・ゲイ、到津十三男訳『ヴァイマル文化』みすず書房)
- 19 Werner, Bruno E.: Literatur und Theater in der Zwanziger Jahren in: Die Zeit ohne Eigenschaften Hrsg. von L. Reinisch. Stuttgart 1961. 文化と政治の年 46 Werner, Bruno E.: Die Zwanziger Jahre. Von Morgen bis Mittelnachts. München 1962 参照。
- 20 Plessner, Helmuth: Die Legende von der zwanziger Jahren. Adorno, Theodor W.: Jene zwanziger Jahre. 5月号 Merkur Jg. XVI (1962) 1. Heft.
- 21 Kofler, Leo: Die zwanziger Jahre und die Folgen in: Zur Theorie der modernen Literatur. Neuwied. Berlin 1962.
- 22 Plessner, Helmuth: Die verspätete Nation. 1959.
- 23 文化の問題について Brenner, Heldegard: Die Kunstpolitik des Nationalsozialismus. München 1963, Roh, Franz: <Entartete> Kunst. Hannover 1962. Wulf, Joseph (Hg.): Die Bildenden Künste im Dritten Reich. Güttersloh 1963.
- 24 Lukács, Georg: Größe und Verfall des Expressionismus in: Probleme des Realismus 2. Aufl. Berlin 1955.
- 25 Emrich, Wilhelm: Literaturrevolution 1910-1925, Die Literaturrevolution und die moderne Gesellschaft in: Protest und Verheissung. Frankfurt a. M. Bonn 1960.
- 26 Hermand, Jost: Expressionismus als Revolution in: Von Mainz nach Weimar, Stuttgart 1969.
- 27 Die sogenannte Zwanziger Jahre. Hrsg. von Reinhold Grimm und Jost Hermand. Bad Homburg von

der H. • Berlin • Zürich 1970

- 28 右掲書' Hermand, Jost: Oedipus lost oder der Massenerleben der Zwanziger Jahre >aufgehobene< Vater-Sohn-Konflikt des Expressionismus.
- 29 右掲書' Grimm, Reinhold : Zwischen Expressionismus und Faschismus. Bemerkungen zum Drama der Zwanziger Jahre.
- 30 Schneidder, Karl Ludwig : Zerbrochene Formen Wort und Bild im Expressionismus. Hamburg 1967.
- 31 Der deutsche Expressionismus. Formen und Gestalten. Hrsg. von Hans Steffen. Göttingen 1965
- 32 Kolinsky, Eva : Engagierter Expressionismus. Politik und Literatur zwischen Weltkrieg und Weimarer Republik. Stuttgart 1970
- 33 Expressionismus als Literatur Gesammelte Studien Hrsg. von Wolfgang Rothe Bern und München 1969. 筆者の書評は日本ドイツ文学会編『ドイツ文学』誌一九七〇年秋、四五号に掲載。
- 34 右掲書' Thomas, Hinton R. : Das Ich und die Welt, Expressionismus und Gesellschaft. Daniels, Karlheinz : Expressionismus und Technik. Lohner, Edgar : Die Lyrik des Expressionismus.
- 35 六〇年代にはダダイズムが復活して、美術界でもネオ・ダダとよばれる傾向がみられた。それと同時に、ヘルム・ユング、グロッセ、ハウスマン、シュヴェイターズ、ヒュルゼンベック、リヒター、アルプ、エルンスト、ツァラなどドイツ、スイスにおけるかつてのダダイストたちの回想録、アンソロジー、ドキュメント、作品集などが多数出版されたが、これらのダダイストについての学問的なモノグラフィーが書かれたのは、シュヴェイターズ、ハートフイールド、エルンスト、アルプに限られ、全体的な研究書は、わたしの知る限り、Prosenec, Miklavz : Die Dadaisten in Zürich. Bonn 1967, 及び Duwe, Wilhelm: Die Kunst und ihr Anti. von Dada bis heute. Berlin 1967. のみである。なかで、あつたあつた Expressionismus als Literatur には第五章として Dadaismus などについてかわれているが、それも文学的ダダイズムに限られている。筆者は最近「ドイツにおけるダダイズムについて」書いた（『表現主義の理論と運動』、河出書房新社）。
- 36 Schmied, Wieland : Neue Sachlichkeit und Magischer Realismus in Deutschland 1918-1933, Hannover 1969.
- 37 Klieemann, Helga: Die Novembergruppe. Berlin 1869.
- 38 Schmidt, Diether (Hg.) : Manifeste, Manifeste, Dresden 1964. 以下。
- 39 Beyer, Manfred: Expressionismus Literatur und Kunst 1910-1923 in: Weimarer Beiträge 1960-IV
- 40 Deutsche Malerei und Grafik in der ersten Hälfte

des 20. Jahrhunderts. Einleitung von Elisabeth Speer.

41 Pawlowa, Nina : Expressionismus und Realismus

in : Zur Geschichte der sozialistischen Literatur 1918
-1933. Berlin 1963.

42 Nedoschiwin, G.: Das Problem des Expressionismus.
in : Kunst und Literatur Januar 1968, Heft 1.

43 Ragon, Michel : L'Expressionisme. Paris 1966.

44 Willett, John : Expressionism. London 1970. (独
訳、仏訳あり)

45 原書名 Kaufmann, Hans : Krisen und Wandlun-
gen der deutschen Literatur von Wedekind bis
Feuchtwanger. Berlin・Weimar 1966. 邦訳は長橋美美

子ほか九名の共訳、ミネルヴァ書房刊。